
ミスパーフェクト

柳 大知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミスパーフェクト

【Nコード】

N4512F

【作者名】

柳 大知

【あらすじ】

博士が開発したのは優秀な人工知能を持つ完璧なロボット

ある高級マンションの最上階に白髪の男が住んでいた。

男の容姿は平凡だったが、それを十分に補うだけの金があり、これまで多くの美女と交際をしてきた。しかしどれも長続きせず、人生の半分をとうに終えた今も独り身だった。

男が結婚できなかった一番の原因はその性格だろう。男は女性に対して完璧さを求めた。それ故、少しでも気になる点があると必ず厳しく注意をする。その結果しばらく我慢していた女性もやがて限界を向かえ、去って行くのだ。

人生80年と考えると男の余生は残り十数年、男は結婚よりも自分の死を意識しだしていた。

そんなある日、男の古い友人の博士から久々に電話が掛かってきた。

急に何かと思えば、同窓会の誘いなどではなく、新製品のテストに協力して欲しいとのことだった。急な事で驚きはしたが男はそれを快諾した。

翌日、博士は男の家へやってきた。

「なんだよ、君結婚したのか？それとも娘がいたっけか？」

玄関で出迎えた博士は若くて美しい女性を連れていた。

「いやいや、僕も君と同じさ」

博士は後頭部にしかない白髪を掻きながら、中でゆっくり説明する

と言った。

男は女性に向かい挨拶をしたが、女は無表情のまま何も言わなかった。

「ずいぶん無愛想だな、まあ中へ」

男は気に障ることがあるとそれをすぐに口に出してしまう。

「すまんね」

部屋に入り三人はリビングのソファに腰掛けた。

「で、君の言う新製品って何だね？」

男がそう訊くと博士は黙って、隣の女性を指差した。

「まさか、君、これが？」

「まさにそうなんだよ、長年の苦勞の末にこれは生まれたのだ。私は完璧なロボットを造りだしたんだよ」

「おいおい、本当かい？」

それを訊くまで人間だと思い込み疑わなかったのだから見た目は完璧だった。

「触ってごらん」

博士はそういつてから隣に座っている女性に何か指示をした。

すると彼女は、前かがみになり対面にいる男に向かい美しい腕を差し出した。

男は彼女の腕を撫でた。

その感触は確かに人間に近かったが、かといって生身の女性の肌に触れたときのような気持ちよさは無かった。さらにその腕を握ると力を入れた男の指先に柔らかい肉では無く硬い金属の感触が伝わってきた。

「確かに、ロボットのようだね……」

男はその腕の感触に少し失望した。

「資金的にも今はこれが限度でね、これが上手くいけば改良もできるだろうが」

博士が小声で指示をすると、ロボットはゆっくりと姿勢を正した。

「それで君、テストというのは何をするんだい？」

「ああ、そうだね、実はこれには人間の脳のような人工知能がついていてね、例えば料理の本を読ませればその内容を人工知能が記憶する。こちらで材料さえ用意してやれば本の通りに料理を作る事ができるのだ。さらに、料理の味に注文をつけ指摘してやれば、それを記憶し次からは注文通りの味付けで料理を作るようになるんだ」

「ほう、面白い、ほとんど人間じゃないか！」

「だが問題もあるんだ、この人工知能は育て方次第では戦争兵器にもなりえる、なのでこのまま商品として売り出すのは非常に危険だ。そこで私は人工知能から行動プログラムだけを抜き出す技術を開発し、そのプログラムに基づき行動するロボットを同時に生み出したのだ」

「ちょっと待ってくれよ、つまりだな、彼女は進化するロボットだが、商品にするのは進化しないロボットという訳か」

「その通りだが、商品用のロボットも搭載されたプログラムのアップデートを行うことで新たな技術を使用できるようにする予定なのだ。そうやってアップデートを繰り返して万能ロボットにするつもりなのだ」

「おっと、もちろん人を傷つける可能性のある能力は一切覚えさせないつもりだよ」

と博士はつけ加えた。

「すごいよ君、これは世紀の大発明だ！」

話を聞いた男はすっかり興奮していた。

「だいたい分かってくれただろ。それでテスト兼育成を頼みに来たんだ。君なら厳しく接し彼女を立派な家政婦に育ててくれると思うたのだよ。彼女は複雑なので僕もしばらく泊まらせてもらうけど協力してくれるかい？」

「興味深いし面白そうだ。だが、具体的には何をすればいいんだ？」

「彼女はすでに私が雇った家政婦からある程度の家事を教わっているのですね。君は彼女を新しく雇った家政婦として扱ってくれればいいよ、そして至らぬ点があったら厳しく注意してくれるだけで良いのだ」

「それなら簡単だな」

「だが、いくつか注意がある、彼女は繊細なので家事以外の技術は

君からは教えないでくれ。外へ出すのも危険だ。それとTVを見るときは彼女をスリープモードにする必要がある、変な事を覚えてしまいう可能性があるからな、まあそれらは追々説明するでしょう」

こうして、白髪の男二人とロボットの奇妙な生活が始まった。

共同生活1日目

夕食は彼女に作らせることになった。

私が愛用していた料理本を渡し、記憶することを命じると彼女はテンポ良くページをめくっていき、あっという間に完了しましたと言った。

メニューはハンバーグと決まり、私は料理の出来に期待しながら材料を買いに出かけた。

見事に完成したハンバーグは私が普段作るものと見た目には何ら違いは無かった。だがそれを口にとすると、美味しいのだが僅かに自分で作ったものとの違いを感じた。彼女は本のレシピ通りにつくったので、私が隠し味としてソースに混ぜるスパイスを入れなかったのである。もちろん、これは私のミスだった。

それを博士に告げ、次はスパイスを入れるように命じようと提案したが、結局プログラムに柔軟性を持たせるため、そのスパイスが材料の中にあつた場合はソースに混ぜると教えることになった。

共同生活2日目

彼女の働きぶりは中々優秀である、だが、洗濯物のたたみ方が少し気になったので教えることにした。下着のたたみ方を教えると彼女は女性用の場合は？と訊いてきた。我が家に女性用下着は無いぞと博士に言つと、なんと博士は彼女に身に着けている下着を脱ぐよ

うにと命じた。私は年甲斐も無くハツとしてしまったが、博士は完璧なロボットと言いながら見えない細部までは精巧に作っていたことがわかった。

共同生活 4 日目

料理に関しては料理ごとの工夫や、食材の鮮度の見分け方など、教えることが多くまだ時間がかかりそうだったが、その他の家事に関しては私の指導もあってか完璧といえる領域に達していた。それには博士も大満足のようなうた。

博士は料理を継続的に教えながら今後は新たな能力を教えていこうと言った。

私がこれまで教えたものは一人暮らしの男の場合の家事なのだ。

私は彼女の分身在幅広く活躍するためにはもっと多くの能力が必要だと提案した。

共同生活 7 日目

彼女はどんどん成長していく、家事に文句のつけ様は無く料理もほとんどマスターをした。

この日、私は彼女の需要について博士と論議した。

博士は、製品版は購入者の望む容姿に出来るし、命令された事を行っているとき以外は大人しく立っているだけなのだから、人間の家政婦とは違い気兼ねなく生活でき、おまけに材料さえあれば一流の料理をつくるのだから、それだけでも需要があるはずだと言った。

共同生活 9 日目

今日私は一人だった。博士は彼女の現在の人工知能のメモリーのバックアップをとるからと彼女を連れ自宅へ帰って行った。何でも

その取ったメモリーが製品用のプログラム第一号になるらしい。さらに、これから彼女に新たな能力を教えていく段階でもし不要な能力を覚えさせてしまったときにはこのバックアップを上書きすることで彼女の能力は保存されていたデータの状態に戻るといふ。

うーん、私にはさっぱりだ、良く考えると博士は凄い…

共同生活 10 日目

博士は車に機材を大量に積み込み帰ってきた。これからは彼女が新たな能力を覚えるたびにバックアップを取るといふ、博士は私のマンションが気に入ったそうだ。博士のおかげでこんなに楽しい生活が出来ているのだし、協力は惜しまない。

だが、今日は彼女を休ませたいとの事で、夕食は久々に私が振舞った。

共同生活 11 日目

彼女に辞書を渡し記憶するように言った。さすがに多少時間は掛かったが、彼女はそれを暗記し、言葉の意味を尋ねると瞬時に答えが辞書の通りに返ってきた。

次に彼女に六法全書を渡した。その後、ある過去の事件の概要を彼女に伝え、その場合の量刑を訊ねると彼女は『懲役10年、情状酌量があれば8年です』と答えた。

その様子を見ていた博士が実際はどうなんだと私に訊いた。その裁判は実際に懲役8年の刑で結審していた。

共同生活 12 日目

礼儀作法、書道、急病時の対処法、語学、など様々な能力を彼女に身につけさせた。

ただただ彼女は凄いとしかいい用が無い。

共同生活 13日目

私達は彼女を外に出す準備をすることにした。今日は3人で近くのスーパ―へ歩いていき、

私達は彼女に幼稚園児に向かい母親が言うように『知らない人には着いて行くな』『道路を渡るときは右を見て左を見て』と何度も教えた。

共同生活 14日目

いよいよ彼女を一人で買い物に行かせることになった。といつても心配な私達は、彼女には言わずに後をつけていった。何事も無く用事を終え帰宅した彼女が鍵の掛かった玄関のドアを開けようとした瞬間、慌てて私達は散歩から帰ってきたふりをし、彼女の前に現れた。

気のせいだろうが彼女は私達を見て不思議そうな顔をしていた。

共同生活 15日目

彼女を近所になら使いに出しても問題ないだろうということになった。

だが、これはあくまで人工知能を持つ彼女だけの能力で製品版のプログラムには組み込めない、なので製品版のプログラム開発をするときには、その度、彼女のメモリーを書き換える必要が出てきた。

共同生活 16日目

今日博士が、変なことを言った。何事も完璧な彼女はどこか私に

似ているというのである。 私は、そんなことはない、とだけ言うておいた。

共同生活 17 日目

博士は製品版の第一弾プログラムにできるだけの能力が揃ったと言った。

主な能力は、料理、家事、4カ国（英、仏、中、韓）語の翻訳、辞書などの知識、子供の世話、ペットの世話など…

たしかに私もこれだけあれば十分に感じた。

博士は販売の準備を進めるため、「私のいない間は、何も教えな
いでくれよと博士」と言い残しデータを持って自宅へ帰った…

- - -

さて、博士は準備のため一旦自宅へ戻った。何も教えるなど言われたばかりだが、せっかくのチャンスだ。兼ねてからやってみたかった事があったのだ。

博士が設定していったスリープモードを解き彼女を起こす。

少し時間が掛かってから、彼女はパチリと瞑っていた目を開けた。

「なあ」と私は彼女に話しかけた。

彼女は不思議そうに首を傾げた。

「一度、訊いてみたかったのだが、お前何かやりたい事はあるのか？」

私は普段何も言わない彼女だが、実は何か思っていることがあるの

ではなかるうかと考えていた。

「言つてよろしいのですか？」

彼女は驚いたようで目を大きく開き、訊いてきた。

「ああ、いいとも」

「もつと知識が欲しいです、普段見せていただけないTVや本を沢山見たいです」

何だそんなことが…

私は、「博士が帰つてくるまで好きにきなさい」と言った。

あとで怒られるかも知れないが、どうせメモリーを元に戻せばいいのだし、意外に新たな発見が見つかるかもしれない。

私は彼女のためにTVをつけると、キッチンへ向かい夕食の準備を始めた。今日は彼女にゆつくり自分の時間をやろう。

出来上がったハンバーグを皿に乗せグラスにワインを注ぐ完璧な夕食の出来上がりである。

私が食べようとしているところを、何故か、彼女がじっと見ていた。

「どうかしたのかい？」

私がそう訊ねると彼女は私に近づきハンバーグの乗った皿を手に持ち自分の顔に近づけた。

「何だね、君に匂いはわからないだろう？」

「いえ、違います」

と言った彼女は台所へ入っていき、何をするのかと思ったらすぐに戻ってきた。

戻ってきた彼女の手に握られていたのは、スパイスの入った小瓶だった。

「スパイスがあるときは、ソースに混ぜるとおっしゃったのに、このソースにはスパイスが入っておりません」

そういつて彼女は皿の上のハンバーグをじーっと見ている。

「そんなはずは無いぞ、ちゃんと入れたはずだ」

私はハンバーグを一口食べた。だが、彼女の言うとおり、ソースに僅かな物足りなさがある。

「はっは」

と私は思わず笑ってしまった。

その様子を不思議そうに見ていた彼女が首を傾げながら口を開く、
「どうされたのですか？」

「何、忘れただけだよ」

「何故、忘れるのです？」

「ははっ、私も年だしね、もう君みたいに完璧ではないのだよ…」

彼女とこんな会話をするのは、今日が初めてだった。

こいつが人間だったら…

年甲斐も無くロボットの彼女に恋心とも何ともいえぬ不思議な感

情を抱いていた。

そんな不思議で幸せな気持ちに酒が進み、食事を終わると私はソファで眠ってしまった。

ふと目を覚ますと、隣で彼女が私を見ていた。

「どうした…」

私は寝ぼけ目を擦りながら言った。

「いえ、人間の方の眠っているところを見るのが初めてでしたので」

彼女は無邪気な笑顔を浮かべている、初めて会ったときは比べ物にならない豊かな表情、まるで本物の人間のような…

こんな娘がいたら私は幸せだっただろうに…

側のTVは私がつけたときからつけっ放しなのだろう、時計を見ると23時、博士はまだ帰っていないようだった。すっかり寝込んでいたようだ…

「あの…」

彼女が、私を見つめながらそう言う。

「なんだね」

まだ、だいぶ酒が残っているようで、頭はぼんやりしている。

「あのー、やってみたいことがあるのですが…」

私を見つめる彼女の黒い瞳が輝いて見えた。

「好きにきなさい」

ああ…、彼女が人間なら…

「ありがとうございます」

と言った彼女は突然私を持ち上げ、そのまま私を寝室の方へ運んで行った。

彼女の硬い腕は私の体をしっかり支え運んでいく
揺られながら、私はもしかして…と変な想像をした。

だが、寝室に入るとすぐに、あるはずのない物が私の目に飛び込んできた。

ちょっと待った！

と私が言う前に私の体は彼女によって宙に高々と上げられ。

天井から吊るされている丈夫な縄で出来たわっかに私の首はかけられた。

「ま…て…おろせ…」

首に縄がしつかりと食い込み声が出ない。

意識が薄れ行くさなか男は思った。

助かるはずがないだろう、彼女は完璧なのだから。

数時間後、深夜に帰ってきた博士は、首を吊っている友人の死体を目にした。

博士は別の部屋にいたロボットに何があったのだと訊いた。

彼女はこう言った、

「急に死んでやると言って、部屋にこもられたのです」

終

（後書き）

読んでいただきましてありがとうございます。

ややこしい話で書くのにも以上に時間が掛かりました。もっといろんな話に展開できそうな感じでしたが、最初に思いついたオチで書きました。

細かいツッコミでも何でもいいのでコメント、感想いただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4512f/>

ミスパーフェクト

2010年12月25日19時34分発行